「どぶろく改め」

朝晩めっきり寒くなってまいりまして、
この時期になるとより一層、熱燗が恋しくなってきます。
（酒のエピソードなどあって）
酒の話などしていますと一杯やりたい気分になってきますが、
我々同様に酒が好きな人間が出てきますと、話の始まりでございまして。

客Ａ　うー、寒い。何でこんな冷えるんだ。
さっきまであんなに汗だらだら流して力仕事してたってのに。
こういう寒い日には体を中から温めないとな。
ただ、ここら辺はあんまり土地勘が無いからなぁ。
お、あんな所におあつらえ向きの店があるじゃないか。
邪魔するよ。
主人　いらっしゃい。
客Ａ　いやー、冷えるねどうにも。
とりあえず熱燗ひとつちょうだい。
主人　兄さん、いい時に来たね。今日は届いたばっかりの
会津の地酒があるんだよ。
客Ａ　お、いいね。じゃあ、その地酒で熱燗を頼むよ。
主人　あいよ。ただね、うちは熱燗には
ちょっとばかりこだわりがあってね。
今から兄さんに最高の熱燗を出してやるから。
そうだな、兄さんにおすすめは、この純米酒だな！
いいかい、純米酒というのは熱を加えることによって
香りがより華やかになり、飲み口もよりまろやかさが増して、
まるで口の中に磐梯山の景色が広がるような……。
客Ａ　いい、いい！そういうウンチクはいらないから。
早くその酒で燗をつけてくれよ。
主人　本当にいいのか？
客Ａ　はぁ？
主人　本当に純米酒でいいのかと聞いてるんだよ。
辛口の本醸造もあるし、こっちの大吟醸なら、
より熱燗の可能性が広がると思わないのか？
客Ａ　面倒くせえな！ごたくはいいから！
俺は熱燗をクイっと飲んで、家帰って横になれればそれでいいの！
主人　あんた、まだ分かんないのか？！
いいか？酒というものには杜氏（とうじ）の方々、一人ひとりが
思いを込めて、より良い酒になるよう作業を重ねて抽出された、
言わば杜氏の血と汗の結晶だ。あんたは今から血と汗を飲むんだよ！
客Ａ　気持ち悪いな！一気に飲む気が失せるわ！もう分かったから、
その最高の状態に仕上げてくれよ。

主人　（一升瓶から徳利に酒を注ぎ、湯の張ったやかんに入れる）
　　　お兄さん、俺はね、あんたにただ無駄口を
　　　きいてるわけじゃないんだ。
　　　この店に入って、どのくらいの体温になっているか、
　　　どんな体調で、どれくらい酒を渇望しているか。その全てを計算して、
　　　あんたに最適な燗の温度を判断した。
　　（やかんから徳利を引き抜き）
　　　３７．７度。人肌燗だ。
客Ａ　本当かよ。
主人　（徳利に棒を刺し）どうだ？
客Ａ　（棒を見て）３７．７度。
　　　温度計がピッタリだ！
　　　この親父、ウンチクだけじゃないのかよ……。
主人　最後に改めさせてもらうよ。
　　　（匙でひとすくいして飲み）
　　　うーむ、これは…。
　　　たしかに口の中には香りは広がる。
　　　しかしこの燗では酒の魅力を引き出せていない。
　　　悪いな、兄さん。ここは一旦燗のつけ直しだ。
客Ａ　付け直し？いやいや、もういいから。それで飲ませてよ。
主人　待て待て……今だ！（徳利に棒を刺し）
　　　３９．４度。
客Ａ　やっとだよ。それじゃこれで一杯。
主人　（ひとすくいして飲み）うーむ。
　　　うーむこれは……（首を傾げ）これは！
客Ａ　もういいよ！飲ませろよ！
主人　いや、確かにこの香りは絶品だ。
　　　しかし、この酒の実力派表現できているのか？
　　（ひとすくいして飲み）
　　　いや、しかしこの味わいが兄さんには心地よいかもしれない。
　　（ひとすくいして飲み）
　　　だが、この味わいの向こう側を見せるには
　　　この温度では適さないのではないか。（酔い始める）ヒック。

　　（３すくいして飲み、段々とろれつが回らなくなる）
　　　これは、もっと繊細な温度がいるんじゃないかと思うけど、
　　　兄ちゃんそこんとこどう思う？
客Ａ　いや、顔真っ赤じゃねえか！
　　　ろれつも怪しくなってるよ！
主人　なーにを言うておる。おらぁ酔ってるわけじゃ断じてない！
　　　カーッ（突然寝る）
客Ａ　寝ちゃったよ。結局てめえが飲みたいだけじゃねえか。

客Ｂ　やってる？あれ、何だよ。
　　　こいつまた潰れてるのか？
客Ａ　いや、熱燗の味見をしてたら、勝手に
　　　飲んで潰れちゃったんですよ。
客Ｂ　あー、そりゃいつもの事だな。
　　　お前は他所から来た者か？そうか。
　　　じゃあ、ちょうどよかった。
　　　実はちょっとこれを飲もうと思ってな
　　　（一升瓶を掲げる）
　　　え、見た事ないのか？
　　　どぶろくだよ、どぶろく。見た通りのにごり酒だよ。
　　　何せ、うちのどぶろくは絶品だから！
　　　せっかくだから飲んでけ。
客Ａ　でも、こんな店で酒の持ち込みとかいいんですか？
客Ｂ　構やしないよ。ここで会ったのも何かの縁だしな。
　　　そこに茶碗が置いてあるから。そう、それ。
　　　そこにこれを注いで…（酒を注ぐ）
　　　さあ、ぐっといきな。
客Ａ　はい、（酒を飲む）ウマっ！何ですかこれ。
　　　飲んだ事無いですよ、こんなの！
客Ｂ　だろ？うちにはまだいくらでもあるから、どんどん飲んでよ。
客Ａ　ありがとうございます。
　　　（飲んで）美味い！いいお酒ですよ。
　　　こんなお酒に巡り合えるとは思いませんでした。
改め　（戸を叩く）すいません。ちょっとよろしいですか？
客Ｂ　やばい、隠れろ！
客Ａ　何ですか？急に慌てて。
客Ｂ　理由はいいから、とにかく隠れろ！
客Ａ　どうしてですか？
客Ｂ　どぶろく改めが来たんだよ！
客Ａ　どぶろく改め？
客Ｂ　この辺りでは、どぶろくってのは各自の家で作ってるんだ。
　　　しかし、家庭での酒造りは酒税法で禁止されている。
　　　それを取り締まりに回ってるのがどぶろく改めの連中だ。
客Ａ　ていう事は、この酒はひょっとして？
客Ｂ　密造酒だ。
客Ｂ　ちょっと何飲ませてるんですか！
客Ｂ　いいから隠れろ！
改め　はい、動かないで。ご主人？ちょっとご主人！起きて下さい！
主人　はぁい、なんですかー？
改め　だいぶ飲んでますね。
主人　熱燗でふかー？熱燗でひたら、わらひが温度を測りまふよ～。

改め　熱燗はいりませんから。私、こういうものです（手帳を見せる）
主人　あっ、し、失礼しました！
改め　つかぬ事をお伺いしますが、こちらの店にどぶろくを持って
　　　入って来た男はいらっしゃいませんか？
主人　えーと、そういう人はちょっと……。
　　　お客様でしたら今日は一人だけしか来ておりませんので。
客Ｂ　（小声で）おい。
客Ａ　（小声で）何ですか？
客Ｂ　いいか。俺が１，２の３で手を叩いたら
　　　これを持って入口まで走れ。
　　　あとは後ろを振り返らずに走り抜けろ。
客Ａ　できませんよ、そんな事！
客Ｂ　（瓶を押し付け）いいからやれ！
改め　（茶碗を持ち上げ）この茶碗は何ですか？
主人　へ？いや、ちょっと分かりませんが。
改め　この茶碗についてる液体のほのかな香り。それに米粒。
　　　おたく、どぶろくやってますね？
主人　いいえ、滅相も無い！うちはそんなもんに手を出してませんよ！
改め　ちょっと奥を改めさせてもらいますよ。いいですか。
客Ｂ　おい、今だ。いくぞ！
客Ａ　一体何に巻き込まれてるんだよ！
客Ｂ　１，２の３！走れ！
客Ａ　うわー！

老婆　と、それ以来、その男の姿を見た事は無かったそうじゃ。
　　　しかし、時折山の奥の方に行くと、一升瓶を抱えて逃げ去る
　　　何者かの影が見られるようになったとか。それをわしらは
　　「どぶろく抱え」と呼んでおる。どうじゃ？
客Ｃ　いや、何なんですか、この話！
老婆　お前さんがここいらに伝わる民話を聞きたいと言うたからな。
客Ｃ　こんなもん、民話じゃないですよ！
　　　どうせ、おばあさんが今作ったでたらめを聞かせてるだけなんでしょ！
老婆　おや、若いもんにしては随分と察しがいいじゃないか。
客Ｃ　いや、察しじゃなくて勘（燗）がいいんです。

（了）